

22. 山東町長岡 琴岡山裾出土遺物

1

山東町長岡の集落の北東約 500m、弥高川と天野川が合流する付近で両川にはさまれて東西 500m程の独立丘陵がある。この独立丘陵が琴岡山と呼ばれ、この南西裾部の畑地で多量の土器類の出土を見た。出土地点は弥高川と天野川および琴岡山に囲まれた東西、南北とも 500m程の平地部の北端に位置し、丘陵裾の台地部に立地するようである。標高約 140mで周囲水田地帯との比高はほとんど差がない。

2

出土した土器類は、灰釉陶器の皿、埴、須恵器の蓋、埴、瓶、壺、甕、長頸壺、土師器皿、杯等である。

灰釉陶器(1、2) 1は皿形品で、高さ6mm、径7.4cmの低い高台を持つ。断面は長方形に近いが、端部に面取りが無く、丸味を持つ。内面はナデいて稜を取り、タタミ付きとなっている。2は埴形品で、皿の高台に近似したものを持つ。高さ1.1cmと高く、わずかに外方へ開く。1、2ともに灰白色の色調を呈し、胎土は精良である。

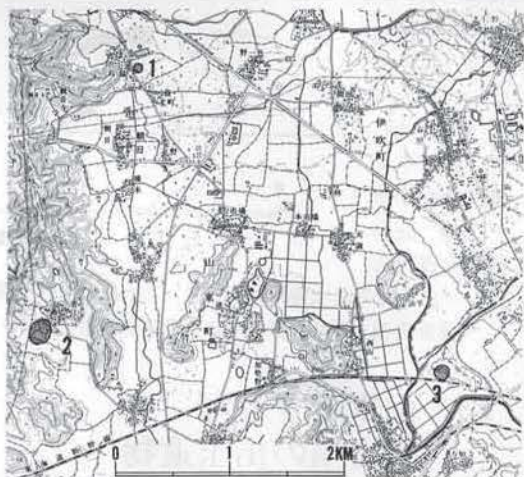
須恵器(3~13) 3~5は蓋で、完形品はないが、いずれも同形式のものと思われる。3には円板状のツマミがつく。4は天井部が水平で、口縁部は2段に屈曲する。3、4ともに天井部外面にへら切り痕を残し、未調整である。5は2段に屈曲した口縁部に、端部は小さく、下方に三角形状につまみ出した程度のものが付く。

埴には高台を持つA類(6~8)と持たないB類(9~11)とがある。A類では、6が端部の面取りが幅3mm程と狭く、稜も甘い。7は端部に面取りが見られ、外方へ開く。8は端部が内外に肥厚し、端面がわずかに凹む。

B類では、9が口縁部径11cm、高さ2.9cmと小形品である。口縁部はわずかに外反し、端部を丸くおさめている。底部との境界は丸味を持たせている。10、11は全体の形状は明らかでないが、外底面にへら切り痕を残し未調整である。

13は壺の底部であろう。底部と体部との境界に稜を取り、体部の開きは小さい。

12は瓶の底部で、体部は丸味を持って開く。高台は



遺跡位置図

(1. すも塚古墳 2. 菅江窯跡 3. 琴岡山遺跡)

扁平で低く、端部でわずかに肥厚している。端面は丸い。

土師器(14、15) ともに皿形品で、14は口縁部の上半でわずかに外反させている。15は厚味があり、口縁部外面に凹凸を見る。

3

以上が琴岡山遺跡の出土品であるが、灰釉陶器は高台に面取りがなく、内面の湾曲もほとんどみられない。体部の形態は明瞭でないが、およそ黒笹90号窯式⁽¹⁾に相当しよう。須恵器の蓋は扁平なつまみと極端に2段に屈曲させた口縁部に特徴を持つ。また、口縁端にわずかにつまみ出した程度で、少なくとも、黒笹78号窯式⁽²⁾をさかのぼり得ないであろう。埴A類には3類の高台を見るが、6は10世紀末~11世紀初頭に比定されている長岡京跡SK03⁽³⁾に類品がある。7、8は6より古式で、長岡京時代の遺物を出土した長岡京跡SD51⁽⁴⁾に類品があるが、高台が扁平で低く、時期的にはやや下るものであろう。瓶もその高台の形態は埴の8に近い。このように、琴岡山遺跡は平安時代、特に後期の遺物を中心に出土している。当遺跡は2河川と1丘陵に囲まれた500m四方程の狭い平地の北端に位置している。この付近は油里川、弥高川、天野川が集結していて、天野川本流となるが、琴岡山の山塊によって、油里・弥高両河川は琴岡山の西側を流れ、天野川は琴岡山で流れを南にかえており、当遺跡の所在する琴岡山南方は、いわゆる、バックマーシェ的な条件下にある。また、条里制による地割りが存在しない。こうし

た地理的な環境が当遺跡の性格を規定するものと思われるが、このことについては今後に待たねばならない。

(田中勝弘)

注(1)(2)『世界考古学大系』4.(昭和36年)。

(3)(4)徳丸始朗他「長岡京跡左京

三条二坊第2次発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』1976、京都府教育委員会、昭和51年)。



山東町琴岡山遺跡出土遺物実測図

23. 山東町すも塚古墳の出土遺物

1

すも塚古墳は、山東町大字野一色の上塚(前方後円墳)・中塚(円墳)の両古墳が所在する舌状丘陵の裾部台地において、明治45年の同字西元寺本堂改築のための土取り工事中に発見されたものである。その時に、横穴式石室の石材とともに多量の遺物の出土をみているが、これらは「坂田郡誌」で紹介されたのみで、その後資料化されたことがなかった。最近、福岡澄男氏によるこれらの実測図に接する機会があり、ここに提示することとした。

2

すも塚古墳の出土品は、須恵器、武器、装身具、馬具類であって、ここに掲載しないものもあるが、それらについては後日に期したい。

須恵器類では、提瓶2、蓋杯11、高杯2、横瓶1が記録されている。このうち杯身には3形式のものが見られる。1は口縁部の径10.4cmとやや小型で、口縁部の立ち上りも非常に小さく、受部の高さにほとんど近くなっている。湖北地方の後期古墳の編年⁽¹⁾では、長浜市諸頭山2号墳に近い。2と3は口縁部径12~12.5cm、器高3.7~4.4cmと口径に対し扁平で、口縁部は短かく、内傾している。底部のヘラ削りも粗雑で、余呉町上ノ山1号墳に相当する。4は口縁部径11.2cmに対し、器高4.9cmと底部に丸味があって比較的深い。口縁部は内傾しているが比較的長い。近江町黄牛塚古墳に近似している。5の蓋についても、天井部と口縁部との境界が明瞭でなく、わずかに端部を屈折させて区別している程度であり、黄牛塚古墳出土のものに類

品がある。このように、杯類では6世紀後半の後葉から7世紀初頭の間で三形式が見られ、他の須恵器類についてもこの期間に含まれる。

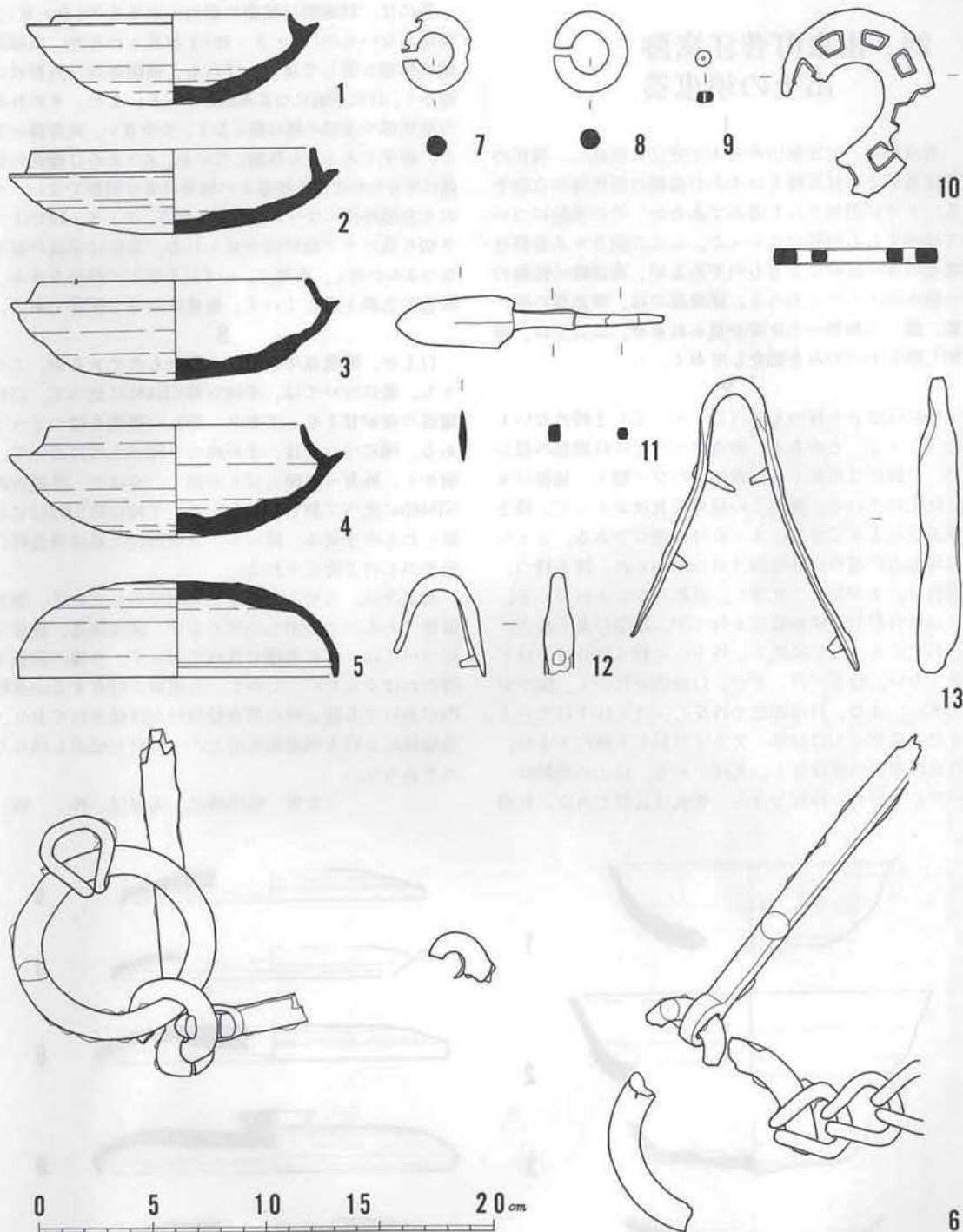
武器では直刀、鐔、鏃が出土しているが、ここでは鐔と鏃を紹介しておく。鐔は鉄製倒卵形のもので、復原数9個の方形透孔があげられている。外形、透孔は打抜き後に研磨しているようである。鏃は腸挟りが見られ、鋒につづいて横断面長方形の棒状部がつき、さらに下方に茎がつく。基部には木質部が遺存し、筥に挿入されていた様子がうかがえる。

装身具には郡誌に記載された銀環の他に金環、ガラス製小玉がある。銀環は長径3.5cm、短径3.3cm、金環は長径3.5cm、短径3.1cmとほぼ円形で、太さはともに0.9cmと太い。ガラス小玉はライトブルーの色調を持つ。

馬具については、郡誌には鎖付鉸具、籠、轡があげられている。このうち、鎖付鉸具は鎖鎖の可能性はある。轡は鉄製環状の鏡板のつく簡素なものである。銜は二連式で引手とともに、環で鏡板に取り付けられている。轡は、いわゆる第四期⁽²⁾に多く出土する形式のものである。

3

以上が、すも塚古墳出土の副葬品の一部であるが、およそ6世紀後半後葉から7世紀初頭にかけて使用された横穴式石室を持つ古墳であったことは、出土遺物から明らかであろう。湖北地方において、馬具類を出土した古墳としては、余呉町上ノ山1号・木之本町栗谷・同町狐塚・浅井町今庄・長浜市岩町・同市大門・米原町石淵山・同町耳谷・近江町塚の越・同町山津照神社など諸古墳が知られている。⁽³⁾すも塚古墳出土のものは、上ノ山1号・栗谷・石淵山等の古墳に近い形式である。また、中山・布勢・諸頭山1号・黄牛塚古墳等、馬具の副葬のみられない古墳が長浜平野南端に集中しているが、これらとの対比は今後の課題であろう。



山東町すも塚古墳出土遺物実測図

(文責 田中勝弘 実測図提供 福岡澄男

トレース 坂口勝彦)

注(1)田中勝弘「湖北地方の後期古墳の編年—最近の調査例を中心に—」(『近江地方史研究』第3号、昭

和51年)

(2)小野山節「馬具と乗馬の風習—半島経営の盛衰—」(『世界考古学大系』第3巻、昭和34年)

(3)坂口勝彦「近江国馬具集成」(『土盛』第10号、昭

24. 山東町菅江窯跡 出土の須恵器

1

当遺跡は、坂田郡山東町大字菅江に所在し、現在の菅江集落と舌状丘陵をはさんだ南側の谷奥部に立地する。すでに周知された遺跡であるが、その実態については必ずしも明瞭でなかった。ここに紹介する資料は地元の方の採取になるものであるが、当遺跡の性格の一端を示すものであろう。採取品には、須恵器の埴、蓋、甕、土師器の小片等が見られるが、ここでは、図示し得るもののみを紹介しておく。

2

埴には高台を持つもの(2・4・5)と持たないもの(1・3)とがある。前者のうち2は口縁部の破片で、口縁部は短かく、直線的のびて開く。端部は丸く仕上っている。底部との境界は丸味があって、稜を取らないようである。4・5は底部片である。ともに口縁部との境界にへら削り痕が認められ、稜を持つ。高台は、4が端部で肥厚し、面取りがなされている。5は逆台形状の横断面を持つが、端部は丸く仕上げられている。ともに低く、外方への踏んばりもさほど強くない。後者では、1が、口縁部が短かく、開きが大きい。また、口縁端部で外反し、丸く仕上っている。3は、底部から口縁部へ大きく屈折して移行するが、外面境界部の稜は甘く、丸味がある。以上の埴類は、いずれも胎土に砂粒を含み、焼成は良好である。色調

は、1～3が濃灰色、4・5が淡灰色を呈している。

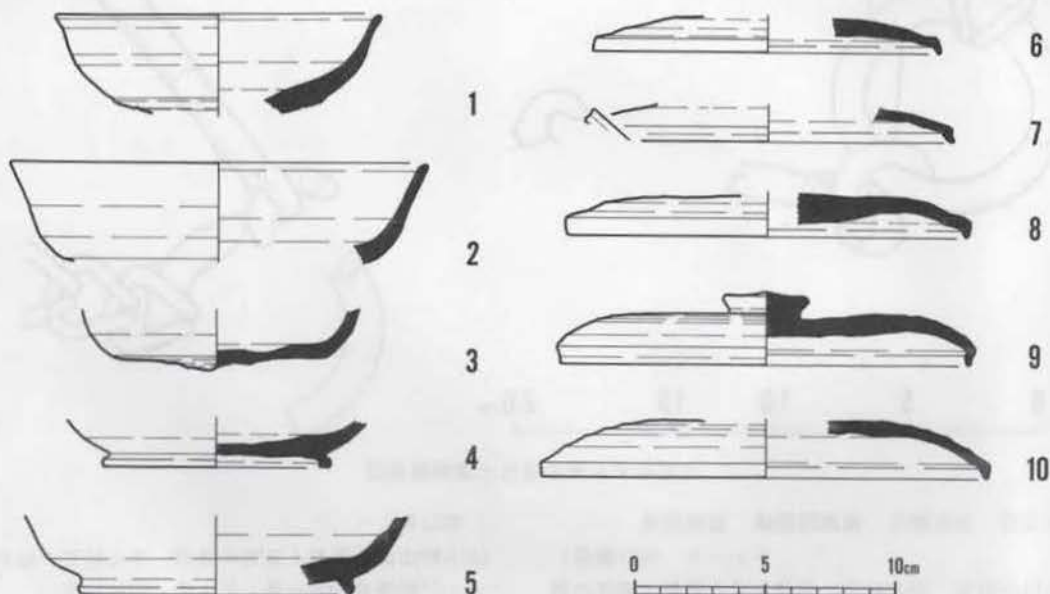
蓋には、口縁部に屈曲の認められるもの(6・8)と屈曲しないもの(7・9・10)とが見られるが、口縁端部の形態に関しては、いずれも、横断面逆三角形に短かく、ほぼ垂直につまみ出している。また、その外面の屈折部や端部の稜は鋭くなく、やや甘い。天井部が低く、扁平である点も共通している。6・8の口縁部の屈曲はゆるやかで、天井部との境界はまだ明瞭でない。6の天井部外面にはへら切り痕が残る。7・9・10ではへら切り後のナデ整形痕が見られる。9には中高の扁平なつまみが付く。蓋類は、いずれも胎土に砂粒を含み、灰色の色調を呈していて、焼成は良好で硬質である。

3

以上が、採取品中の図示し得たものであるが、このうち、蓋については、平城宮跡SD485に比べて、口縁端部の稜が甘くなっており、新しい要素を持つようである。埴については、その高台を持つものにおいて、短かく、外方への踏んばりが弱く、やはり、平城宮跡SD485に比べて新しい。むしろ、平城宮跡SK219に近似したものを見る。従って、当遺跡出土品は奈良時代後半のものと考えられる。

当遺跡は、スサ入りの粘土塊が伴出していて、須恵器窯であることは明らかであるが、窯体構造、数量等については、まだ明確にされておらず、今後の調査を待たねばならない。しかし、当遺跡の所在する山東町内においても数カ所の須恵器窯跡が確認されており、当地域における須恵器生産上の一資料を提示し得るものであろう。

(文責 田中勝弘、実測図 林 純)



山東町菅江窯跡出土須恵器実測図